

「たとえば村人を先頭に首都 に向かってデモ行進・・・」

—2012年9月南アフリカ・ナミビア・ドイツ訪問記—

岡野内 正

<「9月になったのに、あてにしていた8月分がまだなの…」>

今回の旅のハイライトは、なんといっても、世界で初めてのベーシック・インカム支給実験を続ける村の運命。ナミビア全国でのベーシック・インカム導入に先駆けて、執拗に反対する大統領を説得するために、推進派が集めた募金を財源としてその村で支給実験を開始したのが4年と半年前のこと。当初の予定の2年を過ぎて、とてもいい実験結果が出たのに、大統領は、うんといわず。推進派は、支給額を若干減らし、さらに募金を集めて2年間延長して実験を継続しながら、キャンペーン。それでも大統領はうんといわず。その2年間が終わった今年2012年1月からは、実験継続のための募金と支給で、毎月の自転車操業。我々はその村を訪れた9月初めには、まだ8月分が支給されていない状態。…「9月の明日から学校が始まるのに、あてにしていた8月分がまだなの。困ったわ。」と口ぐちに言う村の女性たち。

<「村の代表を出して、政府に…」>

我々を村に案内してくれたベーシック・インカム推進連合事務局長のPさんは、村の中心にある大きな木の下に村人50人あまりを集めた集会で、事情説明。なんだか重苦しい雰囲気の中で我々が紹介され、「村人に何でも質問してもいいよ」と。「この事態をどうしたらいいと思いますか？」との学生の質問に、顔を見合わせる村人たち。あるおばあさんが口火を切る。「とにかく村の代表を出して、政府にお願いするしかないよ。」村で一番通用する言語コエコエゴワブから英語に通訳してくれるPさんは、それを翻訳してくれただけだったが、リーダー格のじいさんを含めて、何人かが同時に発言。…今から思えば、それは、ほんとうに重要な集会となるべきものだったのかもしれない。村の運命を村人自身で話し合っただけで、という意味で。

<「とにかく、広く訴えて、募金を集めるんだ…」>

村を訪れる前日に首都の推進連合の事務局を訪れた。Pさんはいよいよ実験村へのベーシック・インカム支給が滞ってきた危機的状況と、打開の方向を我々の質問に答えて熱弁してくれた。政府、というより大統領がなぜがんとして賛成してくれないかについては、「ほんとうにわからない!」。政府に財源はあ

るし、あらゆるデータが全国導入のメリットを語っていて、もはや反対の論拠はない。…だから、世論を通じて大統領を動かすしかない。…先週は、アフリカンス語のラジオに出た。なんと、白人からもかなり支持のメールが来たよ。今週はここらあたりから南部の黒人がしゃべるコエコエゴワブ語のラジオに出るよ。ベーシック・インカム支給実験継続のために継続的に募金してくれる人や企業をナミビアの中から集めてるんだ。これまでは、ドイツからの教会の募金に頼りすぎていて、ヨーロッパ経済危機のせいで、急に資金がこなくなったからね。とにかく、広く訴えて、募金を集めるんだ。そして、ほかの場所でも、…大統領や政府与党大部分の人の出身地になってる北部でも試験的な支給をやりたいね。自分の政治的地盤でベーシック・インカム給付実験の受給者ができて、支持者がふえると、ずいぶん違うと思うんだ。

<政治家に期待せず、市民社会の力で…>

「なるほど、政治家に期待するんじゃないくて、市民社会の力で、実際にベーシック・インカムの支給をやりながら、それを広げていこうっていうわけですね。」それって、私の今回の学会発表と同じ意見ですね！…ブラジルでもその方向だし。…などと、いささか興奮して口走れば、Pさんも、「いや、ほんとうに、ベーシック・インカムが政治家の小道具として使われてしまうと、だめだね。南アフリカでもそうだったし。…とにかく、ここでは大統領が反対しちゃうと、みんなそれを気にして、教会の中でさえ、大統領に気がつかって、ベーシック・インカムなんて、という人たちが。政治文化っていうのかね。大統領のいるところじゃ、ベーシック・インカムの話をしないっていう感じ。…ベーシック・インカム命のブラジルの上院議員のスプリシーを知ってるだろう？彼は、ナミビアに来たら、空港からすぐにあの村を訪れて、それから大統領に会いに行って、大統領、ぜひあの村にいて村人の話を聞いてください、なんていったものだから、大統領、カンカンに怒っちゃって。大統領に話があるなら、村人がここに来るのが礼儀っていうものだ、外国人が指図するもんじゃねえ、って。スプリシーにとっては最悪の日だったよ。」とにかく、ベーシック・インカムの効能を宣伝しながら、地道に募金を集めて実験を継続してさらに宣伝に使い、実際にベーシック・インカムという特効薬を使うモニターを増やしながら、世論を作っていく。これが、Pさんの戦略。

<労働組合は闘い方を知ってる…>

これを柔軟路線とすれば、我々が滞在した首都の安宿に来てもらって話を聞いた、ベーシック・インカム推進連合の構成組織となっているナミビア労働組合連合のHさんは、強硬路線を主張。「もう実験は終わったんだ。ベーシック・

インカムが効果抜群なことははっきりしたんだ。もう議論の段階じゃない。あとは、政府にやらせるしかない。俺たちは、労働組合だ。労働組合は、闘い方を知ってる。もう闘うしかないんだ。」

<退役軍人年金のときのように…>

「といいますと、具体的にはどんな…？」

「たとえば、村人を先頭に、首都に向かってデモ行進、なんてのはいいと思うな。…タイミングを選べば、効果的だよ。…独立直後の1995年総選挙の直前に、ナミビア独立のゲリラ戦争に参加した戦闘員たちへの年金、退役軍人年金を要求する運動が盛り上がった。当時の大統領は、外国の圧力と財政負担を考えて、頑固に反対していた。運動する側は、独立ゲリラ運動の聖地だった北部の村から、首都に向かって、元ゲリラの退役軍人たちが、車いすや松葉づえでデモ行進を行うと発表した。それには、大統領の古い友人なんかも参加を表明して、マスコミも大騒ぎ。選挙で勝ちたかった大統領は、すぐに年金導入を発表。結局デモ行進は行われなかったのさ。そういうものさ。人々が動いて、実力で、政治を変えなきゃ。政治家を動かさなくっちゃ。来年は選挙があるし、タイミングとしては、今がねらい目さ。」…なるほど、たしかに、市民社会が動くってことは、政治を避けることではなくて、市民の力で、政治を動かすってことね。目からうろこ、という感じ。なんだか、おもしろくなってきた！
「それじゃ、そういう話もでてるんですか？村人とデモ行進やろう、っていうような？…」と聞けば、「それがね、そういう話がまだまだこれからなんだよ。」

<カミータ主教の病気>

ベーシック・インカム推進連合の中心人物であり、ナミビア最大のキリスト教宗派である福音ルーテル教会の指導者、カミータ主教に会いたいのだけど、…というリクエストは、彼の病気のためについに果たされず。ドイツの国際学会にも行くはずだったけど、それもキャンセルとか。…推進連合内部の話し合いがあまり進んでないのは、そのせいだろうか。…そういえば、教会の内部でも、熱心でない人がいて、けっこう大変なんだよ、と牧師でもある事務局長のPさんも言ってたし。…もしかすると、カミータ主教という反アパルトヘイト独立闘争の英雄でもある宗教指導者に依存しすぎて、教会に依存することになってしまった推進連合という組織のあり方が問題かも。Hさんのように労働組合の熱血幹部とそれについていくベーシック・インカム断固指示の労働組合員たち、それにベーシック・インカムのすごさを知ってしまった村人たちとがうまく結びついて、メディアにアピールする行動をとれば、大統領がヒヤリとするような広がりをもつ大衆的な運動になるかもしれない。ところが、そっちの強硬路

線に至る道をなんとかそらす方向に推進連合が追い込まれていて、Pさんと村人たちが、当面のやりくりを追われている。…そんな姿が見えるような。

<村でのお泊り>

だが、村人にとって、日々の生活は待ったなし。自分で切り開いていかねばならない。無理かな、と思いつつ、村での宿泊をリクエストしたら、すんなりとOKが出て、Pさんも「安全だよ。大丈夫。」と太鼓判。ゼミ生を中心とする18名の今回の旅行参加者のうち、10名ほどが村での一泊のお泊りに立候補。公務員基準の近代的な水道会社の宿舎に泊めてもらうことになった3名を除いて、3軒の民家に分かれてお泊り。民家といっても、都市近郊の不法占拠スラム地区見るようなトタン板で四方を囲ったバラック仕様が基本で、せいぜいブロックか煉瓦を部分的に使ったおうち。…私たちが泊めてもらったのは、元小学校長先生とベーシック・インカム実験が始まってミシンを買い込んで、近所のおばさんとドレス製造を始めたその奥さんの家。昔使っていたというトタン板のおうちを占領させてもらう。砂地に絨毯の切れ端を敷いたたけの床にベッドがあって、割れた鏡の入ったタンスやら壊れた冷蔵庫やらに囲まれ、ドアを閉めるとまだ冬の名残りで夜は冷えるが中は暖かい。

<リンゴ、オレンジ、レモン、ナツメヤシ…>

屋外の小さなトイレは、穴を掘っただけかと思えば、便座があり、自分でドラム缶の水をすくって手を洗いながら流す水洗式。水道のじゃ口は屋外にひとつしかなく、そこから水を運ぶ。食器などの洗いは大事に、木の根っこに流しこむ。翌朝早く、その木を眺めていると、元校長先生が現れて、説明してくれる。「これはリンゴで、これが、オレンジ、あれはレモンなんだ。…ほら、花が咲いているだろう？」確かに、白い花があちこちに。そう、こっちは春なのだ。「これは何かわかるかな？…そう、ナツメヤシだよ。こいつはとにかく育つのに時間がかかる。実がなるまであと30年かな。わしの息子の代だね。」

種や苗は、買ったり、もらったりしたという。ずっと体育の先生だったけど、学生時代の理科の時間に植物のことを教わって、それ以来興味をもってきたという。

<みんなの土地？みんなの自然？>

首都ヴィントフックにも住んでいたことがあるという彼は、校長先生としてこのオチペロ・オミタラ村に赴任してきて、退職後もそのまま残って住み着いているという。村の土地はすべて、基本的には国有地のはずで、住み込むことを希望する者には、地元の土地委員会が土地を分与することになっているらし

い。そうやって彼の一家に割り当てられた土地に、このような果樹を植え付けて、丹精こめて世話をする。その意味は何だろう？…「この村には、ほかに、こんなに果物を植えたりしている人がいますか？」と聞けば、「いやあ、少ないね。ほら、あの隣の人なんかは、全然だめだね。…そのうち立派な果物がなれば、みんな気付くと思うね。そうなってほしいね。」

<これが教会よ！>

そのおうちのすぐ裏手に、大きめの木が一本。幹から、レールのかけらのような金属がぶら下がっている。集会をやった大きな木にぶら下がっていたのと同じようなやつで、人々を呼ぶときにカーン、カーンとならず。「ははは。これが、この村のルーテル教会よ。」私が牧師の代わりよ、とドレス作りの奥さん。村にはカトリック教会の建物があるが、日曜日に神父がくるだけで、だれも住んではない。しかし村の大多数はルーテル派らしい。…「肉を食べすぎてこんなになった」と夫が言うとおりに、かなり肥満系の彼女が、朝の散歩に連れて行ってくれる。少し歩けば、アスファルトで舗装された道路。首都から東にまっすぐ伸びる幹線道路を途中で北上して小型バスで通ってきた道だ。その道を少し歩くと、ホバビスという都市の水がめとして建設されたダムが見えてくる。道の両側にかなり乾燥したいろいろな草が生えている。…これは、おなかの痛いときに効くよ。あれは、怪我をしたときにつけるといいの。…そんな話を聞きながら、ゆらゆらと歩く彼女のあとを追う。

<「ほんとうに悪い、悪い人よ！」>

ダムと反対側の草原というか、灌木があちこちにあるサバンナというか、そのはるかに、井戸から水をくみ上げる風車などが見える。ほとんど車の通らない道路から数メートルのところ、その大自然と私たちを隔てる針金の柵がある。前日に P さんから説明を受けた、19 世紀末のドイツによる植民地化とその後の南アフリカ支配下のアパルトヘイト時代を通じて、白人地主が所有するようになった大規模な野生動物狩猟用のファームだ。ファーム＝農場と頭の中で置き換わって、はてさて、なにを作っているのかな、などと考えていたのだが、なんのことはない、狩猟用に土地を囲ってあるだけのもの。…そういえば、首都の安宿のバーで、名物の野生動物数種類盛り合わせのバーベキューを食べたが、果たしてこういうところから。…

「そうよ。あの柵の向こうは、白人のもの。ほんとうに、悪い、悪い男でね！」悪い男 (Bad, bad man!) というところで彼女は語気を強めた。「柵を越えて、焚き木を集めただけで、小さな子供が動物を捕まえようとしただけで、警察に通報して、罰金 1000 ドルを払わせるの。ほんとうに 1000 ドルよ！」それは、た

しかに、当初のベーシック・インカム 1人1か月 100 ナミビア・ドルの実に 10 か月分になる。

<奪われた土地と資本、白人地主と多国籍企業>

強硬路線の労働組合代表のひとり H さんが強調していた。「ドイツ侵略以来の植民地化とその後の南アフリカ占領下のアパルトヘイト支配のもとで人々から奪われた土地と資本はまだ返されていない。白人地主と多国籍企業が握ったまま。…問題は、社会主義の理念が消えたことだ。アパルトヘイト反対の独立闘争を闘った人々の間では、独立後の土地と資本の国有化、社会主義化は当然と思われていたんだ。それが、ソ連崩壊とともに、経済政策の方向が見失われた。白人地主も多国籍企業もアパルトヘイト時代そのまま、さらに外資導入と民営化、自由化で経済発展をめざすっていう。ところがどうだ。政府の優遇策で数年間操業してナミビア労働者をさんざん低賃金で酷使した多国籍企業は、工場を東南アジアに移転した。鳴り物入りで登場した中国企業も数年で撤退するものが次々。奪われた土地と資本を取り返す闘いなしに、貧困も労働問題も解決しないんだ。…多くは公務員や大企業の労働者の労働組合員たちは、ナミビア人口の半数以上を占める恐ろしく貧しいナミビア国民の中ではまだ恵まれた方だ。その労働者たちは、いまの政策じゃなにも解決できないことを見抜いている。だから、ベーシック・インカム導入を支持してるんだ。それは、いまでも続くアパルトヘイト撤廃の闘いなんだよ！」

<今も続くアパルトヘイト…？>

人種隔離政策などと訳されることもあったアパルトヘイト政策。ナミビア訪問のあと、2泊3日で滞在した南アフリカのヨハネスブルクでは、その歴史を記録するアパルトヘイト博物館や、元黒人居住区のソウェト、さらにその中でも特に貧しい人々の住む不法占拠地区を訪れた。…確かに何も変わっていないかも。かつて白人しかお客になれなかったショッピングモールやレストラン、白人しか持ち主になれなかった高級住宅街や高級車に、黒人の新しいお金持ち階級が加わっただけ。「隔離された」貧乏な黒人の暮らしはまったくそのままといってもいいかもしれない。…それは、ナミビアも同じだ。首都のショッピングモール街は、多くの黒人たちでごった返していて、その真ん中にあるスーパーマーケットでは、東京とさほど変わらない値段の食品が飛ぶように売れ、品物でいっぱいのカートの長い行列が、レジでのカード支払いによってどんどんさばかれていく。たった一回の買い物で、あの村のベーシック・インカムの数か月分を使ってしまう人たちの群れ。…あの人たちは、独立とアパルトヘイト廃止後に政権についたかつての黒人解放の独立闘争ゲリラ戦士たちとつながっ

て、公務員や民営化された大企業の仕事にありついた一部の人々。ナミビア全土でみれば、ほんの一握り。大部分の人々は、百年以上前から侵略してきた白人たちに土地と資本を奪われて、食うや食わずで、仕事を探し歩く境遇のまま。

<ミュンヘンの国際学会>

ベーシック・インカム・地球ネットワーク (Basic Income Earth Network)、略してBIEN (フランス語やスペイン語で「良い」の意味) の2年ごとの大会でドイツのミュンヘンへ。私の報告会場は、日本に関する分科会で、小さな部屋に20人ばかり。英語のペーパーを配って、ベーシック・インカムは、食うや食わずで、仕事を探し歩く境遇にある現代世界、とりわけ第三世界の賃金労働者たち、その賃金奴隷ともいうべき境遇からの解放をめざす、歴史的な社会革命だという持論を強調した。だから、それは、けっして簡単ではない。グローバル化を進める多国籍企業のもとに世界中から集まるお金を、世界中の人々の世論の力で、少しずつ奪い返していく。そんな地道だが激しい闘いをやるしかないのだ。ナミビアと南アフリカで見てきたけど、アパルトヘイトは、まだ続けているのだから。…そんな演説をした。

<人間解放のための、世界革命>

昨年訪れた、ブラジルの農村地帯でベーシック・インカム支給を始めた友人たちは、その報告を喜んでくれた。さらに、ドイツの左翼党の活動家だったか、大会のプレイベントのシンポジウムで司会をやっていたお兄さんも、人間解放のためのベーシック・インカムという視点は最近の自分たちの議論とかみあうし、それを世界革命として問題提起している点は、ヨーロッパの議論ではあまりなくて、おもしろいという。彼からは、来年にヨーロッパ規模のシンポジウムをやるのでぜひ報告を、というご招待も。

<涙のインド・プロジェクト>

学会全体のハイライトは、おそらく、大会場で行われて、聴衆の涙と拍手をさらった、インドで今年行われたベーシック・インカム支給実験プロジェクトの報告。学会側でプロジェクト推進に協力したイギリスの大学教授のおじさん、プロジェクト・コーディネーターの若いインド女性、すごい迫力のリーダー格の白髪の混じる女性、それに、プロジェクト現場の最下位カーストに属する先住民の女性の話、そして、できたばかりというビデオ作品上映。現場での苦勞がフラッシュ・バックしてきたのか、ビデオをみながら泣き出したのは、イギリスのおじさん。村人たちから、ベーシック・インカム支給で、生きる希望がわいてきたよ、といった、素朴な発言が次々と出るうちに、こちらも、うるう

ると。

<社会運動としてのベーシック・インカム確信犯>

ビデオの冒頭には、横断幕を掲げた色彩豊かなインド衣装の女性たちのデモ行進のシーン。プロジェクトを担当したのは、インドの自営業の女性たちの労働組合、SEWA（セワ）なのだ。露天商や自分で作ったものを販売する個人営業の女性たちを、自己雇用の労働組合として組織し、瞬く間に貧しいインド女性数十万人を組織し、女性のエンパワーメントに取り組むNGOとして国際的に名高い組織なのだ。そのせいもあって、プロジェクトの資金は、ナミビアやブラジルのように支持者の募金ではなくて、ユニセフだったかユネスコだったか、国際機関から。そのせいもあって、期間が終わる今年中には、プロジェクトはきちり終了予定。壇上で報告するSEWAの女性たちは、この成果をひっさげて、インド政府に対して、ベーシック・インカムの導入を要求する社会運動を大規模に展開していく闘志を見せ、やる気満々。最後までしゃべらなかった先住民女性が英語ではない言葉で発言をした言葉の力強いこと。今も残るカースト制度の最底辺で辛酸をなめてきたその女性の、不思議に明るい声を聴いているだけで、意味はわからないのに、こっちは、感動の涙が出てくる。…そう、この人たちにとって、ベーシック・インカムとは、いいアイデアだ、考えてみよう、提案します、なんてものじゃなくて、…生きることの尊厳を世界に認めさせ、自分たちの存在をかけて、闘いとる権利。みじめな賃金奴隷、お金のためにあくせくする奴隷生活からの解放をかけた、人生の希望なのだ。その意味で、保守派にとっては、社会運動の確信犯。その人としての輝きが、まぶしく、美しい。

<インドへ！>

そんなわけで、さっそくその一行とはお知り合いになり、プロジェクトを見に行ってもいいかしら、と。もちろん大歓迎よ、となって、早くも、我々の心は、インドへ。

私の学会報告のための試算によれば、インドでベーシック・インカムが実現されることの意義は世界史的だ。極貧層というか、飢餓に瀕している人の数は、インドでは恐ろしく多い。しかし、物価が安いので、ベーシック・インカム支給のための金額は、驚くほどわずかですむ。そう、全人類から飢餓と貧困を根絶する世界史の夢の実現が、飛躍的に近づく。…国際機関が資金を出すだけの正当性は十分にある。国民が飢えているのに核兵器を持つような絶望の政治を、人類の希望に変える可能性も。…

<なにか励ましあえることを…>

さて、その前に、…いよいよ、新生児から、市が独自にためた基金で、ベーシック・インカムを支給することになったというブラジルのサント・アントニオ・ドウ・ピニャウの町の人々、いよいよ支給実験継続期間でナミビアを追い越すかもしれない同じブラジルのカチンガ・ベリョのことも気になる。昨年につき、来年もいくかな、と。もちろん、ナミビアもなんとか応援したい。…世界のベーシック・インカムをサポートする会のようなのを作って、日本語ニュースを発行して、日本人にもベーシック・インカムの動向を知らせ、基金もつくって、少しはお金を回す。…そんなことをやってもいいね、なんていう話を、空港の長い乗継の時などに。…まだなにも具体化していないけど、ぼちぼち始めたいなあ。(2012年10月25日)